

Juichi WAKISAKA Race Report

2014 AUTOBACS SUPER GT Round 3 -SUPER GT in KYUSHU 300KM -

◆◆ 最後の最後まで粘りの走りで完走を果たす ◆◆

No. 19 WedsSport ADVAN RC F						
Drivers	Qualifying	Final				
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	14位	8位				



■大会概要

開催日：2014年5月31日-2014年6月1日

サーキット：オートポリス（大分県日田市、コース全長：4.674km）

レース距離：65周（303.81km）

入場者数：予選日13, 800名、決勝日24, 400名、合計38, 200名

5月31日、6月1日、大分・オートポリスにおいて SUPER GT シリーズ第3戦「SUPER GT in KYUSHU 300km」が開催され、No.19 WedsSport ADVAN RC Fを駆る脇阪寿一は、パートナーの関口雄飛選手とともに予選14番手からレースに挑み、終盤はSC（セーフティーカー）ランによる混乱の展開になるも、落ち着いたレース運びを完遂。8位入賞を果たし、第2戦に続くポイント獲得を達成した。

今シーズンからGT500車両には共通化された空力パーツの使用が一部義務付けられているが、一方でフロントセクションにはメーカーの個性をしっかりとアピールできるパーツが装着可能。前回の富士では、フリップボックスと呼ばれるローダウンフォース仕様のものが採用されていた。なお、今回のオートポリスにおいても、このローダウンフォース仕様を全車採用することが急遽決まり、各チームともクルマのセットアップに多くの時間を割いたと思われる。

No.19 LEXUS TEAM WedsSport BANDOHでは、5月にスポーツランドSUGOで行ったテストデータをもとにしたクルマ作りを進めオートポリス入り。富士仕様のエアロパッケージを装着し、ポテンシャルアップを目指した。

■5月31日(土)

09:00-11:00 公式練習

14:15-14:30 ノックアウト予選 (Q1)

15:00-15:12 ノックアウト予選 (Q2)

【公式練習】 12番手 / 1'37.915

午前9時。梅雨入りの季節を前に、阿蘇山麓の山あいにあるオートポリス上空には青空が広がった。すでに気温24度、路面温度31度を記録する初夏の天気となり、新緑が映える中、まずはチームメイトの関口雄飛選手がコースに向った。No.19 WedsSport ADVAN RC Fをドライブする関口選手は、まず持ち込みタイヤの確認作業からスタート。予選、決勝に向けての準備を着実に進めていった。

GT300との混走枠の終盤、関口選手が自己ベストタイムを更新、その後脇阪へとスイッチ。満タンの状態で決勝をイメージしたロングランに入った。この間、様々なメニューをこなすべく、精力的に周回を重ねる脇阪。さらにGT500の専有走行では、ニュータイヤでのアタックを行い、セッションを終了。ポジションこそ12番手ではあったが、脇阪によると、クルマのフィーリングが極めて良かったとのこと。欲を言えば攻め切れない部分があったそうだが、クルマやタイヤの方向性がしっかりと見えているため、手応えあるセッションになったことには違いない。



【ノックアウト予選（Q1）】 14番手 / 1'41.401

前回から引き続き、予選はノックアウト方式にて行われた。つまり、No.19 WedsSport ADVAN RC F が Q2 に進出するには、Q1 で全 15 台中上位 8 台までに残ることが求められる。チームではこの Q1 に関口選手をまず送り出した。

GT300 の Q1 が終了し、午後 2 時 15 分からセッションがスタート。気温 28 度、路面温度 38 度と午前のセッションよりも暑さが上昇。これまでと同じくして、ピットでしばし待機していた各車が一斉にコースへと向っていく。しかし、今回はここで思わぬハプニングが待っていた。

午後 2 時 29 分、セッション終了まで 1 分の時点で、一台の車両がコースアウト。タイヤバリアにクラッシュする。ここで走行継続が危険と判断され、赤旗中断に。一方、タイムアタックを済ませたチームは数少なく、結局残り 3 分での再開となった。これでワンラップアタックの機会を手にしたもの、一度アタックラップに入っていたこともあり、リセットしての再アタックは決して容易くない。だが、関口選手は気を新たにアタックを行い、果敢な走りを見せた。気持ちが走りを上回ったのか、そこでわずかにコースオフ。なんとかコースには戻ったものの、タイムロスが響き、1 分 41 秒 401 どまりに。結果、14 番手の順位に甘んじて Q1 敗退となった。

またも惜しくも Q2 進出は叶わず、予選日のセッションを終えた脇阪だが、菅生でのテストを経て、迎えたオートポリスでの手応えはしっかりと感じ取っている様子。「走り始めからフィーリングが良かったんです。朝のセッションでは、ロングランでのタイヤの安定感がはっきりと確認できたので、それが決勝でポテンシャルとしてどういう形になっていくか、楽しみですね。後方からしぶとく追い上げられるようなレースができるといい」と前向きのコメントを残した。



■ 6月1日(日)

09:00-09:30 フリー走行 (09:40-10:00 サーキットサファリ)
14:00- 決勝 (65周)

【フリー走行】 TOP TIME / 1'36.851

両日とも晴天に恵まれたオートポリス。これまでシリーズ終盤、秋の開催だったが、今年は序盤での戦い。九州唯一の国際格式サーキットには熱烈な SUPER GT ファンが朝早くから詰めかけ、2万4千人を超える観客が300kmの決勝レースの行方を見守った。

新緑が映える中、午前9時からフリー走行が30分にわたり行われる。気温25度、路面温度31度と昨日と変わらぬ暑さを感じる。No.19 WedsSport ADVAN RC Fでは、まず関口選手がクルマに乗り込み、決勝セットアップの確認のためコースへ。この時点でガソリンもほぼ満タンに搭載されており、確認を進めつつ、周回を重ねていく。その中で、上り調子にあったクルマで関口選手は1分36秒851の好タイムをマーク。セッション中、このタイムを上回るライバルは最後まで現れず、結果、No.19 WedsSport ADVAN RC Fがトップのままセッションを終了することになった。

なお、脇阪はこのセッションの後半に出走。まずはドライバー交代のシミュレートを行い、コースへと向った。安定した速さを刻むNo.19 WedsSport ADVAN RC Fで各部チェックを行った脇阪。最終ラップで自己ベストタイムをマークし、決勝に向けてクルマの仕上がりが好調であることをしかとアピールできたようだ。



【決勝】 8位 / 3ポイント獲得 (シリーズポイント: 7ポイント、シリーズランキング: 13位)

午後に入り、強い日差しが少し遮られるようになったが、午後2時からのスタートを前に、気温28度、路面温度43度と依然としてレースにはタフなコンディション。300km、65周先のチェックカードフラッグを目指して“熱い”戦いの火ぶたが切って落とされた。

フォーメーションラップを1周で終え、スムーズな流れに沿って戦いが始まる。まずNo.19 WedsSport ADVAN RC Fのステアリングを握るのは、これまで同様、関口選手。オープニングラップの1コーナーでひとつポジションを上げた関口選手は、しばしば前後車両との攻防戦に興じ、その後は11番手で周回を重ねていった。

だが、順調に周回を重ねていた10周目に第2ヘアピンでNo.39 RC Fと接触してしまい、後にドライブスルーペナルティが課せられてしまった。この時点でNo.19 WedsSport ADVAN RC Fは9番手を走行していたが、ペナルティ消化のためにピット

トイン。再び 11 番手から追い上げを開始した。

レースは折り返しを境にしてルーティンのピットインが始まる。だが No.19 WedsSport ADVAN RC F は後方からの猛追を考え、コースが空くタイミングでしっかりとペースアップしたいところ。よって、ピットインのタイミングをライバルたちよりも遅くする戦略を採った。結果、37 周終わりでピットにクルマを戻した関口選手は脇阪へとステアリングを委ね、14 番手から追撃体制に入った。

その後、順調にラップを重ねていた脇阪だが、後半に入ったレースは思わぬ形で波乱の動きを見せることになる。まずは 48 周目、GT300 の車両が第 1 コーナーでハイスピードのままコースアウト、タイヤバリアにぶつかった勢いで車両がバウンド、コース外のサービスロードへと飛び出す大アクシデントを招く。幸いにしてドライバーの命には別状なかったが、すぐさまセーフティカーがコースインする。さらには、この直後、No.24 GT-R がエンジントラブルで黒煙を上げて 1 コーナー先でストップ。レースは一気に慌ただしい展開へ。

一方で SC ランは隊列を整えるまでに時間を要し、レース再開となったのは 57 周目から。チェックまでわずか 9 周での超スプリントレースとして再スタートが切られた。前後車両とのマージンがことごとく小さくなり、10 番手走行中の No.19 WedsSport ADVAN RC F にとっては、バトルを展開する好チャンス！ 脇阪はどんな小さなチャンスも逃さないと、まずは No.32 NSX CONCEPT-GT を逆転。さらにはセミファイナルラップの 1 コーナーで No.6 RC F をも逆転！ 波乱のレースでも底力をしかとアピールすることに成功し、8 位でチェックカードフラッグを受け、2 戦連続での入賞を果たすことになった。



出入りの激しい戦いを走り抜いた脇阪。「今週末は、色々なことがありましたが、僕らのチームは今、一步一步進化の道を辿っている途中なんです。正直まだチームとしての力をすべて披露できているわけではありません。出来る範囲の中で、全ての力を引き出そうと努力をしている途中です。そういう中で、シビアな出来事もありますが、いずれにせよ、どんなことでも次の戦いに活かしていきたいという思いがあります」と週末を振り返った。またレース中は「ピットストップ時や、僕自身のドライブ中でも小さなミスがいくつかありました。SUPER GT では、こういったミスは決してその人、その時だけのミスではなく、このようなミスが起ったときに、チーム全体としていかにフォローできるかが、チームとしての実力を物語ります。まずはフォローし、その先にはミスが出ないようなチームを作っていくなければ、タイトルはもちろん優勝も狙えないと思いますので、そういうことを常に意識し、戦っていけばと思います」と今まさにステップアップの道中にあることを明らかにした。さらに今後に向けて、「今週末はタイヤのコンディションもよく、気持ちよく走ることができたし、終盤のバトルでは久しぶりに楽しいレースができたと感じました。次の菅生でもさらに良い戦いができるように頑張ります」と意気込みを語っている。

次戦は、7月 19 日(土)・20(日)に「魔物が棲む」と言われるスポーツランド SUGO (宮城県仙台市) で開催される。

[Photo Gallery]



